

〈論文〉

幼児の完全主義に関する縦断的検討

——発達の変化および気質との関連について——

西 元 直 美*

A longitudinal study of perfectionism in early childhood :
Developmental change and relation to temperament

Naomi Nishimoto

要旨：本研究は、幼児用他者評価型完全主義尺度を作成し幼児期における完全主義の発達の変化を検討することと、気質との関連を検討することを目的とするものである。

研究1では、小学校4～6年生を対象に作成された「子ども用多次元自己志向的完全主義尺度 (MSPSC)」(桜井, 2005)を基に、幼児を対象とした他者評価型の質問項目(「幼児用他者評価型完全主義尺度」)の原案22項目を作成し、4歳児、5歳児クラスを担当している幼稚園教諭(計260名)に対し質問紙調査を行った。因子分析の結果、3因子構造が確認され「こだわり・心配」、「完全願望」、「高目標設定」と命名した。研究2では、幼稚園児の養育者に対して3歳クラスから5歳児クラスまでの3年間、幼児用他者評価型完全主義尺度および気質尺度(CBQ Short Form)への評定を依頼して縦断データを収集し分析を行った。その結果、完全主義についてはいずれの年齢においても、またどの側面においても性差はみられなかった。また、年齢差について検討した結果、完全主義の3つの側面のうち「こだわり・心配」傾向は年齢がすすむにしたがって徐々に上昇することが示された。「高目標設定」傾向については3歳から4歳にかけて顕著に上昇することが示されたことから、年少の場合には自分に適した目標を定めるのが不得手であることから高すぎる目標を設定するが、年長になると適切な目標設定が可能になると考察された。気質との関連については、気質の下位尺度「注意の焦点化」について完全主義の3側面のいずれとも関連が確認され、特定対象への意識の集中が適応・不適応の両側面をもつ多次元的な完全主義と関連していることが明らかとなった。

Abstract : The purpose of this study was to construct a perfectionism scale for preschoolers, and to investigate developmental changes in the scores on this scale, as well as to examine the relationship between perfectionism and temperament. In study 1, a perfectionism scale for preschoolers, developed based on the Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale for Children (Sakurai, 2005), was administered to kindergarten teachers of 260 preschoolers ages 4 to 5. Using factor analysis, the following three factors were extracted: concern over results, desire for perfectionism, and excessively high standards. In study 2,

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

from when the preschoolers were 3 years old until they were 5 years old, their caregivers provided answers on a perfectionism scale for preschoolers and responded to the Children's Behavior Questionnaire every year. As a result, the scores relating to concern over results tended to increase as ages rose, and scores indicating excessively high standards increased significantly between ages 3 and 4. The results of correlational analysis indicated a positive correlation between perfectionism as a whole and temperament (on the Attentional Focusing subscale).

Key words : 完全主義 perfectionism 幼児期 early childhood 気質 temperament 縦断研究 longitudinal study

I 問題と目的

完璧な状態でなければならぬ、物事を完全に行わないと納得できないといった人格特性を日常的に「完全主義」あるいは「完璧主義」と呼んでいる。完全主義 (perfectionism) とは、状況によって必要とされるよりも、高い遂行の質を自分自身あるいは他者にあまりに多く要求する癖 (Hollender, 1978)、非現実的な高い基準を設定し、それらに脅迫的といえるほど固執して、その基準を達成すること (Burns, 1980)、あまりに否定的な自己評価をともなった過度に高い遂行基準を設定すること (Frost, Marten, Lahart & Rosenblate, 1990) と定義される。

完全主義の傾向をもつ人は、物事をきっちりとこなす人という印象があるが、心理的不適応と関連する人格特性と考えられている (Flett & Hewitt, 2002)。完全主義と不適応との関連や完全主義が不適応を生起させるプロセスを検討した研究 (Hewitt & Flett 1990 a; Pacht, 1984; Blatt, 1995) が多数みうけられ、Flett & Hewitt (2002) のレビューにおいても、完全主義は抑うつ、不安、摂食障害といった不適応と関連することが多くの研究で示されている。

しかし、完全主義が必ずしも不適応と関連するわけではない。完全主義傾向が強いほど抑うつ傾向が強いという研究の一方で、完全主義傾向と絶望感とのマイナスの関係すなわち完全主

義傾向が高いほど絶望感が低いという結果を示す研究も見られる。Hewitt & Flett (1990, 1991) は完全主義を多次元なものと考え、完全主義の基準を自己に求める“自己志向的完全主義” (self-oriented perfectionism)、他者に求める“他者志向的完全主義” (other-oriented perfectionism)、他者から求められていると感じる“社会規定的完全主義” (socially prescribed perfectionism) の3次元で捉え、自己志向的完全主義と社会規定的完全主義のいずれも、抑うつ傾向とのポジティブな相関を示している。それに対して大谷・桜井 (1995) は、社会規定的完全主義は抑うつ傾向および絶望感とポジティブな相関関係にあるが、自己志向的完全主義は絶望感とネガティブな相関関係にあることを示し、完全主義のポジティブな面を指摘している。また、大谷・桜井 (1997) では、Frost, Marten, Lahart & Rosenblate (1990) によって自己志向的完全主義を構造的に捉えた尺度を参考に、完全主義を自己の枠組みで多次元的に捉える尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale: MSPS) を作成し、抑うつや絶望感との関係を検討している。その結果、MSPS の下位尺度のうち「ミス (失敗) を過度に気にする傾向尺度」「自分の行動に漠然として疑いをもつ傾向尺度」では抑うつ傾向および絶望感とポジティブな相関関係が示されたが、「自分に高い目標を課する傾向尺度」では絶望感とネガティブな相関関係が確認されている。

Frost et al. (1990) も「自分に高い目標を課する傾向」は精神的健康とポジティブな関係にあることを指摘している。

完全主義の下位側面についてどの側面が適応的あるいは不適応的であるのか、一致した結果は得られていないものの、完全主義は多次元的な概念として検討されている研究が多い。そのなかで完全主義と人格特性との関係を検討した研究として、怒り・敵意との関連が示されている研究 (Saboonchi & Lundh, 2003; Fedewa, Burns & Gomez, 2005) や、自己志向的完全主義者が怒りや敵意を感じやすい可能性を指摘し、攻撃性との関連を示している研究 (齊藤・沢崎・今野, 2008) があげられる。また、Kobori, Yamagata, Kijima (2004) の研究では、Cloninger, Svrakic & Przybeck (1993) の気質4次元に着目して、自己志向的完全主義と社会規定的完全主義の2側面と気質・性格特性との関係を検討し、自己志向的完全主義は新規性追求 (新規刺激への接近や衝動性、興奮のしやすさなど行動の触発性に関する特性) の低さ、報酬依存 (依存性や愛着、感傷性など行動維持に関する特性) の高さ、固執性 (勤勉性や完全主義傾向など行動の固着性に関する特性) の強さと関連し、社会規定的完全主義は新規性追求の低さ、損害回避 (不安や人見知りな行動抑制に関する特性) の高さに関連していたことを示している。また、中川・佐藤 (2010) は、自己志向的完全主義の下位尺度 (「高目標設定」「失敗懸念傾向」「行動疑念傾向」「完全性欲求」と気質との関連を男女別に検討している。その結果、男女ともに「高目標設定」傾向は新規性追求、固執とポジティブな関連を示し、「失敗懸念」傾向は男性で新規性、報酬依存とネガティブな関連、固執とはポジティブな関連を示していたのに対し、女性では損害回避および固執とポジティブな関連を示されている。「行動疑念」傾向は男女ともに損害回避および固執とポジティブな関連を示し、「完全性欲求」傾向は男性で報酬依存とネガティブな関連、固執とはポジ

ティブな関連を示していたのに対し、女性では損害回避および固執とポジティブな関連が示されている。

完全主義について心理的不適応との関連を検討した研究が多いが、完全主義者であっても適応的な場合もあり、完全主義を多次元で捉えると完全主義のすべての側面が不適応と関連しているわけではなく、むしろ適応と関連していることもある。適応とも不適応とも関連する完全主義であるが、完全主義を適応・不適応という視点からだけではなく、その規定要因を検討している研究がいくつか挙げられる (桜井, 2004; 中川・佐藤, 2005, 2006)。しかし、完全主義の基礎的な発達プロセスを検討している研究はみうけられない。完全主義の多くの研究は、大学生あるいは成人を対象としたものであるが、完全主義を人格特性と考えると、完全主義が青年期以降にのみ適用される概念ではなく児童期以前からその特性は見いだせると考えられる。

子どもの完全主義に関する研究として、桜井 (2005) は小学校4~6年生を対象とした研究において子ども用多次元自己志向的完全主義尺度を作成し、抑うつ傾向との関連を検討している。しかし、幼児を対象としたものは見当たらず、幼児期の完全主義の発達プロセスを検討している研究も見当たらない。

そこで本研究では幼児期の完全主義の基礎的研究として、その発達の变化を検討することを第1の目的とする。また、幼児期における完全主義と気質との関連について探索的に検討することを第2の目的とする。

II 研究 1

1 目的

幼児用の他者評価型完全主義尺度を作成する。

2 方法

対象および手続き 大阪府下にある私立幼稚園

の 4 歳児クラス (5 クラス 計 131 名: 男児 69 名、女児 62 名)、5 歳児クラス (4 クラス 計 129 名: 男児 62 名、女児 67 名) 計 260 名の担任保育者 (4 歳児クラス担当 5 名、5 歳児クラス担当 4 名) に担当園児についての評定を依頼した。質問紙は 2012 年 8 月に配布し 9 月に回収した。なお、本研究は関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を受け実施された。

質問紙 桜井 (2005) により小学校 4~6 年生を対象に作成された「子ども用多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale for Children: MSPSC)」(23 項目) に基づいて、幼児を対象とし他者評価型

の質問項目 (「幼児用他者評価型完全主義尺度」) の原案 22 項目を作成した。MSPSC は「失敗不安尺度」「確認行動尺度」「要求水準尺度」との相関関係が示されており、妥当性が確認されている。回答は「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらでもない」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の 5 段階 (1~5 点) とした。

3 結果と考察

原案の 22 項目について、最尤法による因子分析を行った。固有値 1 以上を基準として固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し 3 因子構

Table 1 幼児用他者評価型完全主義尺度の因子分析の結果 (n=258)

	因子			共通性
	1	2	3	
○こだわり・心配 (10 項目)				
9 失敗をクヨクヨ悩むほうである。	.77	.06	-.09	.58
17 ちょっとした失敗でも、その日一日気にしている。	.76	-.08	-.06	.51
11 自分がしたことがきちんとできているかいつも心配している。	.73	.09	-.03	.58
18 自分がしたことにまちがいがいいか、何度も確かめる。	.71	.15	-.08	.56
19 どんなに確かめても間違いがあるのではないかと気にしている。	.69	-.11	.15	.52
1 一度失敗すると取り返しがつかないと思っているようだ。	.67	.13	-.14	.46
6 自分のしたこと自信が持てていない。	.63	-.24	.07	.37
4 きちんとできていても間違いがあるのではないかと心配している。	.62	.20	.04	.54
14 失敗するとそれをとてども気にする。	.61	.11	.19	.59
8 忘れ物がないか何度も確かめる。	.50	.10	.03	.32
○完全願望 (4 項目)				
2 いったん決めたことは最後までやりとげようとする。	.03	.84	-.09	.65
22 やることはすべて完璧にしようとする。	-.01	.73	.16	.68
12 どんなことでも中途半端はいやなようだ。	.15	.72	.02	.63
15 することは全部片付けてしまわないと気がすまない。	.13	.63	.10	.56
○高目標設定 (5 項目)				
20 他の人にはできないような目標をたてる。	-.03	.05	.70	.51
5 決してできないような計画をたてる。	.03	-.02	.69	.48
13 自分ができること以上の目標をたてる。	-.12	.26	.65	.59
3 いつも一番を目指そうとする。	-.26	.43	.46	.49
21 まわりの子と同じようにできて満足しない。	.16	.07	.46	.34
10 しなければいけないことを途中であきらめてしまう。*	-.33	.44	-.45	.31
因子相関行列				
	1	2	3	
	1.00			
	.38	1.00		
	.41	.51	1.00	

*信頼性検討の結果、削除された項目

造が妥当と判断された。そこで3因子を仮定して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量.40を基準として十分な値を示さなかった2項目（「まわりの子と同じようにできていれば満足している（逆転項目）」「絶対にできないような高い目標はたてない（逆転項目）」）を分析から除外し、残りの20項目に対して再度最尤法・Promax回転による因子分析を行った。最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。

第1因子は「9 失敗をクヨクヨ悩むほうである。」「17 ちょっとした失敗でも、その日一日気にしている。」「11 自分がしたことがきちんとできているかいつも心配している。」などの項目に高い負荷量を示していることから『こだわり・心配』因子を名付けた。第2因子は「2 いったん決めたことは最後までやりとげようとする。」「22 やることはすべて完璧にしようとする。」「12 どんなことでも中途半端はいやなようだ。」などの項目に高い負荷量を示していることから『完全願望』因子を名付けた。第3因子は「20 他の人にはできないような目標をたてる。」「5 けっしてできないような計画をたてる。」「13 自分ができること以上の目標をたてる。」などの項目に高い負荷量を示していることから『高目標設定』因子を名付けた。

各因子の信頼性を検討するため α 係数を算出したところ、第1因子、第2因子については十分な値が得られた。第3因子については「10 しなければいけないことを途中であきらめてしまう（逆転項目）」を除いた場合に α 係数の上昇が期待できることから、この項目を除外し再

度分析をおこない十分な値を得た。その結果、第1因子「こだわり・心配」は10項目、第2因子「完全願望」は4項目、第3因子「高目標設定」は5項目となり、因子ごとの合計得点を下位尺度得点とした。それぞれの平均と標準偏差および α 係数をTable 2に示す。

Ⅲ 研究 2

1 目的

幼児用他者評価型完全主義尺度を用いて幼児の完全主義についての発達的变化を縦断的に検討する。また、完全主義と気質との関連について検討する。

2 方法

対象および手続き 大阪府下にある私立幼稚園の2012年度3歳児クラス新入園児（男児66名、女児39名 計105名、分析対象：男児58名、女児31名 計89名）の養育者に対して幼児用他者評価型完全主義尺度への評定を3年間依頼した（2013年2月、2014年2月、2015年2月に配布し2週間程度で回収）。また、気質尺度への評定も3年間依頼した（完全主義尺度への回答期間後に配布し2週間程度で回収）。なお、本研究は研究1と同様に関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を受け実施された。

質問紙 (1) 幼児用他者評価型完全主義尺度：研究1で検討した22項目のうち、最終的に残った19項目を使用した。回答は研究1と同じく「全く当てはまらない」「あてはまらない」「どちらでもない」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の5段階（1～5点）とし、研究1において3因子構造（「こだわり・心配」「完全願望」「高目標設定」）が確認されたことから、因子ごとの合計得点を因子得点とした。

(2) 気質尺度：Rothbart, Ahadi, Hershey & Fisher (2001) によって開発された幼児に適用可能な気質質問紙（CBQ: Children's Behavior Questionnaire）の短縮版であるCBQ Short Form (Putnam & Rothbart, 2006) の日本語版（沼田,

Table 2 幼児用他者評価型完全主義尺度の平均、標準偏差、信頼性係数（ α 係数）（ $n=258$ ）

	平均	標準偏差	α
こだわり・心配（10項目）	26.80	6.46	.90
完全願望（4項目）	12.43	2.99	.87
高目標設定（5項目）	8.98	3.00	.79

2006) を用いる。CBQ Short Form は 94 項目からなり 15 の下位尺度 (快 (低度)、微笑みと笑い、抑制のコントロール、知覚的鋭敏性、反応性の低下/なだまりやすさ、注意の焦点化、快 (高度)、活動性レベル、接近/肯定的な予測、衝動性、不快、怒り/欲求不満、恐れ、かなしさ、内気) で構成されている。回答は「ぜんぜんあてはまらない」「あてはまらない」「少しあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「あてはまる」「よくあてはまる」の 7 段階 (1~7 点) と「判断できない」であり、下位尺度ごとに平均点を算出して下位尺度得点とした。先行研究 (西元, 2012) において 15 下位尺度得点を用いた因子分析の結果 3 因子構造 (「自己コントロール」「否定的情動性」「高潮性」) が確認され、各因子項目群の平均値が気質因子得点として用いられていることから、本研究においても 15 下位尺度得点を用いるとともに、3 因子得点 (本研究においては因子名を「制御性」「否定的情動性」「積極的活動性」とした) を算出して用いることとした。「制御性」に含まれる下位尺度は「快 (低度)」「微笑みと笑い」「抑制のコントロール」「知覚的鋭敏性」「反応性の低下/なだまりやすさ」「注意の焦点化」である。「否定的情動性」に含まれる下位尺度は「不快」「怒り/欲求不満」「恐れ」「かなしさ」である。「積極的活動性」に含まれる下位尺度は「快 (高度)」「活動性レベル」「接近/肯定的な予測」「衝動性」である。なお、下位尺度のうち「内気」については因子分析の結果において十分な負荷量を示さなかったため因子項目群からは除外されている。

3 結果と考察

(1) 幼児の完全主義の発達的变化 幼児用他者評価型完全主義尺度の年齢別平均点および標準偏差を Table 3 に示す。完全主義について、大学生を対象とした中川・佐藤 (2005) の研究では完全性を追求する姿勢は男性のほうが女性よりも強く、ミスを犯すことを過度に気にする傾

向は女性のほうが男性よりも強いという、完全主義における性差が報告されている。しかし、同じく大学生を対象とした中川・佐藤 (2010) の研究においては性差が報告されていない。そこで、本研究においても幼児における完全主義の性差についての確認を行った。t 検定によって年齢ごとに完全主義因子得点の性差を検討した結果、いずれの年齢、いずれの因子得点にも性差は見られなかった。この結果は、上述の中川・佐藤 (2005) の結果とは異なるものである。しかし、中川・佐藤 (2010) では今回の結果と同様に完全主義の性差は認められておらず、性差についての結果は一貫していない。

幼児の完全主義の年齢差について一元配置分散分析で検討した結果を Table 4.1~4.3 に示す。「こだわり・心配」については $F(2,176) = 3.43, p < .05$ で有意であった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較を行ったところ、3 歳と 5 歳の間に有意傾向の差 ($p < .10$) が見られ、3 歳にくらべて 5 歳の「こだわり・心配」得点の高いことが示唆された (Figure 1)。「完全願望」については $F(2,176) = 1.91, n.s.$ であった (Figure 2)。「高目標設定」については $F(2,176) = 5.23, p < .01$ で有意であった。ボンフェローニの方法を用いて多重比較を行ったところ、3 歳と 4 歳の間に有意な差 ($p < .01$) が見られ、3 歳にくらべて 4 歳の「高目標設定」得点の高いことが示された (Figure 3)。

「こだわり・心配」は 3 歳から 5 歳にかけて徐々に上昇し、「高目標設定」は 3 歳から 4 歳で上昇することが示された。身体的にも認知的にも日々成長発達し、有能感を増していく幼児期において、「自分ができる」という有能感ゆえにできなかったときの失敗をクヨクヨ悩んだり、自分がしたことがきちんとできているか心配するようになっていくと考えられる。完全主義のうち「こだわり・心配」という側面は、自己の有能感の自覚とともにゆっくりと発達していくのであろう。一方、高い (あるいは、高すぎる) 目標を設定する傾向は、3 歳から 4 歳に

Table 3 幼児用他者評価型完全主義尺度の年齢別平均点および標準偏差

		こだわり・心配			完全願望			高目標設定		
		3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
全体 (n=89)	平均	22.54	23.63	24.08	10.53	11.02	10.65	11.61	12.54	12.33
	標準偏差	7.03	7.24	7.69	3.32	2.81	3.18	3.55	3.47	3.59
男児 (n=58)	平均	22.88	24.16	24.90	10.66	10.88	10.62	11.98	12.71	12.45
	標準偏差	6.49	7.48	7.88	3.36	2.58	3.22	3.48	3.69	3.84
女児 (n=31)	平均	21.90	22.65	22.55	10.29	11.29	10.71	10.90	12.23	12.10
	標準偏差	8.02	6.77	7.21	3.27	3.23	3.14	3.62	3.06	3.09

Table 4.1 「こだわり・心配」の一元配置分散分析の結果 (n=89)

変動因	SS	df	MS	F	p
年齢	111.53	2.00	55.76	3.43	.035
誤差(個人差)	11302.19	88.00	128.43		
誤差(年齢)	2861.14	176.00	16.26		
全体	14274.85	266.00			

Table 4.2 「完全願望」の一元配置分散分析の結果 (n=89)

変動因	SS	df	MS	F	p
年齢	11.78	2.00	5.89	1.91	.152
誤差(個人差)	2006.12	88.00	22.80		
誤差(年齢)	544.22	176.00	3.09		
全体	2562.12	266.00			

Table 4.3 「高目標設定」の一元配置分散分析の結果 (n=89)

変動因	SS	df	MS	F	p
年齢	42.49	2.00	21.25	5.23	.006
誤差(個人差)	2583.39	88.00	29.36		
誤差(年齢)	715.51	176.00	4.07		
全体	3341.39	266.00			

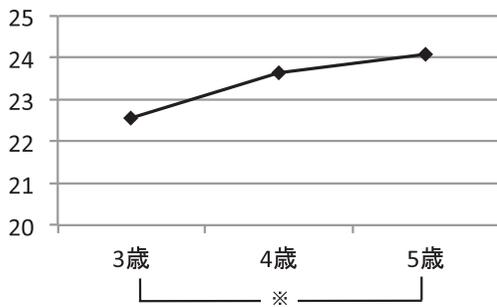


Figure 1 こだわり・心配

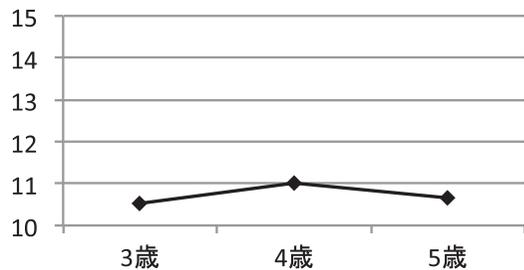


Figure 2 完全願望

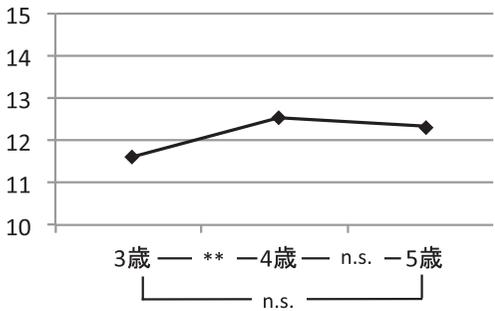


Figure 3 高目標設定

かけて顕著に増大している。自身に適切な目標の設定は自分の能力や環境をある程度正確に捉えることが必要であると考えられる。そうした自分や環境に対する客観的な視点をもつことが4歳頃まではむずかしく、高すぎる目標設定をする傾向が幼児期初期には増大するのではないだろうか。

(2) 完全主義と気質との関連

完全主義の因子得点と気質の下位尺度得点および3因子得点との相関係数を Table 5.1、5.2 に示す。

「こだわり・心配」：気質下位尺度得点との関係について、3歳時では「注意の焦点化」「不快」と正の弱い相関が有意であり、「活動性レベル」とは負の弱い相関が有意であった。4歳時では「不快」「怒り／欲求不満」「内気」と正の弱い相関が有意であった。5歳時では「不快」「怒り／欲求不満」「恐れ」「内気」と正の弱い相関が有意であり、「微笑みと笑い」と負の弱い相関が有意であった。気質因子得点との関係については、「否定的情動性」と有意な正の弱い相関がいずれの年齢においても示された。

「微笑みと笑い」は刺激の強度、頻度、複雑さ、不一致の程度等の変化に伴う肯定的感情の程度、言い換えれば「朗らかさ」であり、「活動性レベル」とは身体的運動の活動傾向、言い換えれば「活発さ」である。これらと「こだわり・心配」傾向に負の相関関係が示されたこと

は、情動反応の強さや消極的な行動が物事にこだわる傾向に関連していることを示唆している。また、与えられた刺激の感覚的性質などによって生じる否定的な感情の程度である「不快」とは3～5歳を通して正の弱い相関関係がみられ、否定的感情の程度である「怒り／欲求不満」や「恐れ」とも正の弱い相関関係がみられた。加えて因子尺度の「否定的情動性」において3～5歳を通して正の弱い相関関係がみられたことから、ネガティブな情動反応と完全主義のうち「こだわり・心配」に関する側面との関連が確認された。

「完全願望」：気質下位尺度得点との関係について、3歳時では「注意の焦点化」と正の弱い相関が有意であった。4歳時では「抑制のコントロール」「反応の低下／なだまりやすさ」と正の弱い相関、「注意の焦点化」と正の相関が有意であった。5歳時では「抑制のコントロール」「注意の焦点化」と正の弱い相関が有意であった。気質因子得点との関係については、「制御性」と有意な正の弱い相関が4歳時および5歳時で示された。

3歳～5歳を通して、行っている課題への注意の集中を維持する傾向である「注意の焦点化」と「完全願望」傾向の間には正の相関関係がみられたことから、中途半端を嫌い、完璧を目指すことを支えているのは集中して何かに取り組める力であると考えられる。集中力は物事を成し遂げる上で重要な要素である。しかし、それが過度に発揮されると自身を追い込むことにつながることもあると考えられる。また、不適的な接近行動を抑制する傾向すなわち、言われたことを守るなど我慢強い傾向である「抑制のコントロール」や、不機嫌や興奮からの回復の早さである「反応性の低下／なだまりやすさ」と正の相関関係がみられた。さらに、因子尺度の「制御性」においても正の相関が確認された。これらのことは、完璧をめざし最後までやりとげることは自分を制御できることによって可能となることを示唆している。

Table 5.1 完全主義因子得点と気質下位尺度得点との相関 (n=89)

	こだわり・心配			完全願望			高目標設定		
	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
制御性	快(低度)								
	微笑みと笑い			-.33**					
	抑制のコントロール				.28**	.22*			
	知覚的鋭敏性								
	反応性の低下/なだまりやすさ				.27*				
	注意の焦点化	.30**		.33**	.48**	.32**		.29**	
積極的 活動性	快(高度)								
	活動性レベル	-.22*							
	接近/肯定的な予測						.22*	.25*	
否定的 情動性	衝動性								
	不快	.28*	.28**	.31**					
	怒り/欲求不満		.25*	.25*					
	恐れ			.22*					
	かなしさ						.22*	.22*	
	内気		.26*	.27*					

※有意な相関係数のみ記載

*p<.05 **p<.01

Table 5.2 完全主義因子得点と気質因子得点との相関 (n=89)

	こだわり			完全願望			高目標設定		
	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
制御性					.37**	.21*			
積極的 活動性							.23*		
否定的 情動性	.22*	.27*	.31**						

※有意な相関係数のみ記載

*p<.05 **p<.01

「高目標設定」：気質下位尺度得点との関係について、3歳時では「接近/肯定的な予測」と正の弱い相関が有意であった。4歳時では「注意の焦点化」「接近/肯定的な予測」「かなしさ」と正の弱い相関が有意であった。5歳時では「かなしさ」と正の弱い相関が有意であった。気質因子得点との関係については、「積極的活動性」との有意な正の弱い相関が3歳時でのみ示された。

楽しい活動に関わる興奮度や肯定的な期待の程度である「接近/肯定的な予測」と正の相関関係がみられた一方で、困難、失望、喪失などと関連する否定的情動、気分の落ち込み、活動力の減退の程度である「かなしさ」とも正の相関関係があり、高い目標を設定する傾向におい

てはポジティブな特性とネガティブな特性のどちらも関連していた。高い目標を設定することによって気分が高揚する一方で、高すぎる目標を設定しそれが達成されなかった場合にはネガティブな感情に陥るのではないかと考えられる。

IV 総合考察

本研究の目的は、幼児用他者評価型完全主義尺度を作成し、幼児期における完全主義の発達的变化を検討するとともに、気質との関係を検討することであった。

完全主義を多次元的なものと捉え、自己志向の完全主義に着目して幼児の完全主義を測定するために他者評価型の尺度を作成した。作成し

た尺度を用いた縦断データを収集し、性差、年齢差を検討した結果、性差は示されなかった。大学生を対象とした先行研究(中川・佐藤, 2005)では性差が示されているが、同じく大学生を対象とした中川・佐藤(2010)では性差が示されておらず、性差に関する一貫した結果は得られていない。幼児期の完全主義における性差についてはさらにデータを重ねて検討する必要がある。

発達の変化すなわち年齢差について検討したところ、完全主義の3側面のうち「こだわり・心配」傾向は年齢がすすむにしたがって徐々に上昇していることが確認された。また、「高目標設定」傾向については3歳から4歳にかけての上昇が顕著であった。「完全願望」傾向については年齢差がみられなかったが、「こだわり・心配」「高目標設定」については変化の様相は異なるものの発達の変化が認められ、完全主義傾向が幼児期をかけて上昇していくことが示唆された。「高目標設定」に関して、3歳から4歳にかけて上昇し4歳と5歳では差が認められなかったことは、年少の場合には自分に適した目標を定めるのが不得手であるが、年長になると適切な目標設定が可能になることを示唆していると考えられる。自分の能力と課題の困難さを判断し、それに適した自身の目標を設定することは、これまでの経験に基づく状況の認知と、自分自身の能力に対する認知、さらに実行した場合の結果の予測が適切であることが必要であろう。そうした認知能力、予測能力は年少児には十分発達していないことが考えられる。適切な目標設定を可能にしている認知能力について検討が必要である。

CBQ Short Form を用いて測定された気質と完全主義との関連を検討した結果、完全主義尺度のうち、失敗に対してネガティブな情動を喚起しやすい傾向である「こだわり・心配」傾向に対しては、ネガティブな情動反応をしやすい気質傾向(否定的情動性)との関連が示され、完璧を目指そうとする傾向である「完全主義」

傾向に対しては、自分の情動や反応をコントロールできる気質傾向(制御性)との関連、時には自分にとっては高すぎる目標をたててしまう傾向である「高目標設定」傾向に対しては、物事に対してポジティブに向かっている傾向が含まれる気質傾向(積極的活動性)との関連が示された。完全主義のどの次元についてもその傾向に対応した気質傾向との関連が確認され、完全主義と気質が密接な関係にあることが示された。また、完全主義の各次元に対して気質の3要素がそれぞれ個別に対応していることが確認されたことは、完全主義の多次元性の確認といえる。

中川・佐藤(2010)の研究では、自己志向的完全主義の「高目標設定」傾向「失敗懸念」傾向「行動懸念」傾向のいずれにおいても、Cloninger et al. (1993)の気質次元のうち「固執」との関連が示されている。「固執」とはその傾向が強いと忍耐強く熱心に物事に取り組むと考えられる気質の1次元である。本研究においては気質下位尺度のうち「注意の焦点化」について完全主義の3側面のいずれとも関連が確認されている。「注意の焦点化」とは集中して何かに取り組むときの持続性であるが、「固執」あるいは「注意の焦点化」といった特定対象への意識の強い集中が、適応不適応の両側面をもつ多次元的な完全主義と関連していることから、こうした気質が適応あるいは不適応とどのように関連するのか、年齢変化も含めて検討する必要があると考える。

付記：本研究は JSPS 科研費(課題番号 24730552)の助成を受けて実施した研究の一部です。本研究にご協力いただきました幼稚園の保護者の皆様ならびに幼稚園の先生方に心より感謝いたします。

引用文献

- Blatt, S. J. (1995). The destructiveness of perfectionism: Implications for the treatment of depression. *American Psychologist*, **50**, 1003-1020.
- Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for self

- defeat. *Psychology Today*, 34-52.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-990.
- Fedewa, B. A., Burns, L. R., & Gomez, A. A. (2005). Positive and negative perfectionism and the shame/guilt distinction: Adaptive and maladaptive characteristics. *Personality and Individual Differences*, **38**, 1609-1619.
- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2002). *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1990). Perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of Social Behavior and Personality*, **5**, 423-438.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social context: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- Hollender, M. H. (1978). Perfectionism, a neglect personality trait. *Journal of Clinical Psychology*, **39**, 384.
- Kobori, O., Yamagata, S., & Kijima, N. (2005). The relationship of temperament to multidimensional perfectionism trait. *Personality and Individual Differences*, **38**, 203-211.
- 中川明仁・佐藤豪. (2005). 両親の養育態度と子どもの完全主義との関連. 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集, **14**, 157-158.
- 中川明仁・佐藤豪. (2006). 母親の養育態度が子どもの完全主義に与える影響についての検討. 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集, **15**, 157-158.
- 中川明仁・佐藤豪. (2010). Cloningerの気質4次元と自己志向的完全主義との関連. パーソナリティ研究, **19**, 38-45.
- 大谷佳子・桜井茂男. (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, **66**, 41-47.
- Pacht, A. R. (1984). Reflections on perfectionism. *American Psychologist*, **39**, 386-390.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., Hershey, K. L., & Fisher, P. (2001). Investigations of temperament at 3-7 years: The Children's Behavior Questionnaire. *Child Development*, **72**, 1394-1408.
- Saboonchi, F., & Lundh, L. G. (2003). Perfectionism, anger, somatic health, and positive affect. *Personality and Individual Differences*, **35**, 1585-1599.
- 齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之. (2008). 自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として. パーソナリティ研究, **17**, 60-71.
- 桜井茂男. (2004). 子どもと親における完全主義の関係. 筑波大学心理学研究, **28**, 37-42.
- 桜井茂男. (2005). 子どもにおける完全主義と抑うつ傾向との関連. 筑波大学心理学研究, **30**, 63-71.
- 桜井茂男・大谷佳子. (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, **68**, 179-186.